

百段坂

百段坂から一日が始まり、下ってその日が終わる・・・

小田高の歴史が江戸藩校（集成館）からはじまって二百年もあつたこと、さらにそこから三百年も遡る小田原北条の最後の砦・詰め城となった地であったこともまるで知らずに、あの百段坂を上り下りしていたことが、何か勿体ない日々であったように思う。

さらに、二つの校訓「至誠無息」「堅忍不拔」、その文言はさすがに覚えているが、誕生のいきさつや由来・意図するところ、講堂に掲げられた扁額のそもそもについて、知ろうとする姿勢が無かつたせいも、まるで記憶に無い。

その千数十日は、進学校だったからだろうか、色々な行事があつたにもかかわらず、当時の僕にとつては記憶の薄い学園生活であつた。

．．．．．
それでも、抜けがたく記憶に残っているのは、百段坂を上りきつた椋林に、聳えるように後ろ手にした先輩応援団から掛けられる「オッス！」に「お早うございませう」と大きな返答を強いられた。その応援団諸兄から校歌や応援歌、こちゃえ節を伝授された鎮遠の鐘の下がる中庭。そして授業では、眠気覚ましの擦り半鐘（競輪場の鐘の連打）。

あとは、富士登山の寒い山小屋に於ける掛布団の奪い合いやマリリンモンローに扮してまんざらでない気分を味わつた運動会の仮装行列。運動神経が無いにもかかわらず、無謀に取り組んで、脳しんとうを二度も起こしたサッカーやラグビーの体育時間。その体育科目が随分と多かつた。そんなもので、他に思い出が無い。

．．．．．
しかし、嫌な思い出も無い。

先ず、本分の勉学において、まさしく文武両道であつたことを好

ましく思っていた記憶がある。僕の成績は何をとつても冴えなかったが、それでも不満は無く過ぎたのではないかと思う。

多分、三学年通して机を並べた同級生が皆優しく友好的で嫌な雰囲気味わったことが無かったからかも知れない。

.....

このように、特筆することもなく過ぎてしまったようだが、よく考えてみると、「その時代があったからこそ、その先が展開した」と思っていることが二つあった。

それは何といつても、友人の存在に尽きる。

僕にとって、大事な二つの役割をもたらしてくれたと思う。

一つは、常に僕が一方的に注目していた友人が居た。

小学校では桜の木の下で同級生に本を読んで聞かせる姿にびっくりして以来ずっと身近に、中学校では少し離れて、当の高校では他クラスで会話もほぼ無く終わったが、品性や学業において、尊敬し続け対抗心など抱く余地がないものの、常に意識の底にあった。

ところが、この先の進学を考えねばならなくなった三年の秋、その彼と比較する事でなく、漫然と僕自身の取り柄は何なんだろう？という思いに至ったことがある。この先の自分自身を考えたのだ。

ひよっとして、それが心理学者・エリクソンのいう自己アイデンティティ（自己認識）を得ようとしていた姿だったのか。多分、彼にはもとより同窓諸氏に随分と遅れた気付きだったに違いない。

何を考えたのか・・・

ほんのひと時であったが、僕が五、八歳の頃、頻りに叔父の箱根細工の工房で入り浸って遊んでいた記憶がよみがえったのだ。

そして選んだ道は、工芸。少しばかりの絵心と関心のあった幾何学を結び付けた苦肉の策だったが、これなら、ずーっと意識していた彼でなく、「柳川」で生きられるのではないかと。

しかし、強い目標で無かったせいか、当面の目標の大学には入っ

たものの、やがて方向が変容してしまうことになる。

いずれにしろ、彼が視野にいてくれたお陰であった。

もう一人、何かにつけて頼っていた友人の存在があった。

詳しく聞いたことは無いが、彼は早くから父親が居ない家庭で育ったようで、寂しかったのではないかと思うが、それを何ら感じさせず、寡黙の中に逞しさと優しさを持ち合わせていた。多分、包容力のあるお母さんを中心にした温かい家庭が醸成したものでらうと思う。

それが頼もしく、尊敬し、何でも話せる存在となった。

御幸が浜や酒匂川の堤を歩きながらの長い散歩で人生を語らい、ひとことでは言い尽くせないほどの時を過ごした。僕にとっては、兄貴的存在として、常に身近にいてくれたことになる。

こうした全幅の信頼を寄せる存在は財産に違いない。

何十年も経った今、つくづく思うことである。

結局、成人前の青年期後期にあった僕にとって、「自己アイデンティティ」は遅まきながらも、かろうじてその入口に立ったことになる。そして「全幅の信頼を寄せることの出来る親友」は、高校生活でしっかりと得たものだ。

.....
後年になって、

同窓会に何故か縁の無かった僕には、随分と遅ればせの参加となったが、WEBの存在は有り難かった。WEBを覗いた時、ふるさとを見たような感覚を覚えたのだ。

現役と云われた組織の中から、退職を機にぽつねんと放り出された隠棲を続けて来て、久しぶりに仲間のところに戻ったような帰郷意識を感じて、とても嬉しく思った。

今更ながら、同窓の集いは代えがたいものだと感じる。

.....

さて、
およそ小田高生であるならば、「校史に誇りを持ち」、「校訓を座右の銘」にして欲しいと願う。

- ① 五二〇年もさかのぼる小田原北条は平和な治世を百年間も守った。当時の戦国時代に無い快挙である。その北条の詰城の跡地に建つのが我が学舎
- ② 二〇〇年前にルーツを持つ小田原藩校から引き継いで、二宮尊徳翁を尊敬した吉田庫三校長で始まった校史
- ③ 校訓「至誠無息」と「堅忍不拔」が生まれた経緯とその意図、および講堂の扁額の由来

類い稀れな歴史の風土に建ち、長きに亘るルーツを持つ学校は、
そうそう無い、またその過程で産み出された校訓は、これまた全国
に稀である。

.....

百段坂は、あの頃の足腰を鍛えてくれた。

校史は、ほんの少しのプライドを与えてくれる。

校訓は、人生の足腰を鍛えてくれるに違いない。

(出稿にあたり、2組下赤氏に訂正・加筆をして頂きました)

